

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第66回ワークショップ @仙台・種次 東部道路

むすび塾

種次地区は南東部の六郷地域の田園地帯。周囲に高台がなく、震災時は高さ約6mの東部道路に住民が駆け上ることが避難の要。その約350人とされ、うち約230人がネクスコ東日本に保護されたとの記録がある。

視察は近くの同区三本塚地区の避難階段で実施し、参加者が入り口の柵を蹴破って上った。震災時の津波到達地点を示す表示板が、階段中ほどの高さ約2mの地点にあることも確かめた。

視察後に地区集会所で行った語り合いは、地元の主婦柴崎美恵子さん(74)が震災の際に東部道路に避難した体験を紹介。「トラック運転手が道路からよそへ出てきたら、車を伝い、よじ上った。鉄砲水が迫っていたが、何とか逃げられた」と振り返った。

若林区を拠点とする被災地支援団体「ReRoots」(リルーツ)理事の二木洋行さん(69)は、他県から来たボランティアに、東部道路を緊急避難場所指定していることを説明した。

高さ6m 緊急時に有効



仙台東部道路の避難階段を上り、ネクスコ東日本の阿部さん(左端)から説明を受ける参加者
—仙台市若林区三本塚

高速道の津波避難活用

河北新報社は4月22日、津波避難をテーマに、通算66回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を仙台市若林区種次地区で開いた。住民のほか、復興支援活動や仕事で地区を訪れる学生やタクシー運転手を含めて13人が参加。東日本大震災の際に津波をせき止めた盛り土式の仙台東部道路を視察し、震災後に整備された避難用非常階段の使い方を確認、備えの心構えを新たにした。

震災前から「東部道路を避難場所」と求める住民運動があったことを取り上げられ、元「仙台市東部地区津波対策連絡会」事務長の菅野猛さん(67)が約1万3000人の署名を集めてネクスコな「津波を体験した人ほど車で」

東部道路の防災面での評価が高まる一方、「一般道から避難階段の場所が分かりにくい」と改善を求める声が出た。車での避難を優先したいとの意見も相次ぎ、種次町内会会長の太田重義さん(71)は「津波を体験した人ほど車で」

東北大災害科学国際研究所の今村文彦所長は、道路の渋滞や損傷など車避難に伴う危険性を指摘した上で「地域で一度、車避難の方法を確認したほうがいい」と提案。種次地区に津波避難ビルが完成したことにも触れ「避難先が複数あることは車の渋滞緩和にも有効」と、さまざまな選択肢を考慮する必要性を説いた。



東部道路の模型(中央)を囲み、津波避難の在り方を語り合った
—仙台市若林区種次

東日本大震災の体験や教訓を振り返り、専門家と共に防災や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。次回のむすび塾は27日、東京新聞と共催で東京・墨田区曳舟地区で開きます。

非常階段を整備

宮城沿岸4市町に13カ所

仙台東部道路は巨理インターチェンジ(IC)―仙台港北ICを結ぶ24・8mの自動車専用道路で、仙台平野の海沿いを南北に貫く。東日本大震災で約1.5〜2mの津波に襲われたが、道路が地上約6mにあることから波の勢を抑え、住民らの一時避難場所にもなった。これを踏まえネクスコ東日本は2011年9月から12年2月にかけて、常磐自動車道の山元IC―巨理IC間の防災効果について「震災時に津波の到達時間を遅らせ、浸水範囲も狭めた」とCG画像を使って示した。

設置箇所は地図の通り。仙台市に5カ所、名取市岩沼市に各3カ所、巨理町に2カ所あり、入り口の柵を蹴破って上るタイプとスライド式のはしごを下ろして使うタイプがある。

今回の「むすび塾」では仙台市若林区の種次地区にある避難階段「仙台3」を視察。東北大災害科学国際研究所の今村文彦所長は、東部道路の防災効果について「震災時に津波の到達時間を遅らせ、浸水範囲も狭めた」とCG画像を使って示した。

むすび塾に参加して



【災害に備えて】仙台市職員として若林区のまちづくりに関わったが縁で、「東部道路を避難場所」と求める住民運動の事務局をしてきた。実現前に震災が起きたのは無念だが、願いかつて避難階段ができたのは感慨深い。今後も盛り土構造の道路の有効性を伝えたい(団体役員・菅野猛さん(67))



【災害に備えて】東部道路は、関西や四国からも視察に訪れるなど防災面で注目されている。昨年11月の福島県沖地震で津波警報が出た際には、宮城県巨野町の常磐自動車道が避難に使われた。安心して使える高速道にしたい(ネクスコ東日本東北支社仙台東管理事務所副所長・阿部重雄さん(55))



【津波から逃げる】津波から逃げ遅れ、内陸に移動できなくなった人が最後の手段として使われるのが東部道路。地元住民は車で避難を考えた人が多いと思うが、東部道路の避難階段は住民以外の人も緊急時に利用できる。ただ、入り口が見つけにくいなどの課題もある(種次町内会会長・大友重義さん(71))



【災害時は、住民が同じ危機意識を持つて行動しなければならぬ。避難する際は過去の経験を過信せず、周囲の意見を素直に聞き入れる姿勢が必要だ。情報の共有は多くの命を守ることにつながる。今後、住民同士で防災の課題を語り合う場を設けたい(種次町内会副会長・大友連さん(71))



【震災を経験して】東部道路で命拾った。震災直後に自宅から車で逃げたが、犬と一緒に避難所で迷惑を掛けると思い、また車で出たら渋滞に遭遇。東部道路近くで津波に襲われ、間一髪道路に引き上げられた。海沿いでは常に高い所を意識しておくことが大事だ(主婦・柴崎美恵子さん(74))



【震災を経験して】勤務先からの帰宅途中、若林区今泉で津波に遭遇した。仙台南部道路のガード下に入ったら「それは危ない」と声を掛けられ、体を持ち上げてもらってフェンスを乗り越え、南部道路に避難した。止まっていた車の中へ招かれ、車内で一晩を過ごすことになった(主婦・柴崎美恵子さん(74))



【訓練で東部道路の避難階段を上ったのは2回目。いい場所だと思えば、女性には柵を蹴破るの力がいるなと感じた。家族に障害者があり、車が唯一の避難手段だと考えてきたが、東部道路への避難を体験したり参加者の意見を聞いたりして、いろんな避難方法があると気付いた(主婦・柴崎悦子さん(67))



【今後に備えて】何通りもの避難ルートを用意しておく必要があると感じた。沿岸と内陸では避難経路が異なり、居場所によっては自転車や車で逃げざるを得ない場合もある。地域の地形や特徴を知り、たて避難行動を考え、その結果をマニュアル化するなどして周知したい(リルーツ理事・二木洋行さん(69))



【参加して】東部道路は、ボランティアとして所属する「リルーツ」が津波避難場所の指定しているが、入り口が狭く、遠くからでは位置を確認しづらい。改善の余地があると感じた。今回のように関係機関の人に直接、意見を伝える機会がもっとあればいいと思う(東北学院大2年・若田瞳さん(20))



【今後に備えて】地域ごとの避難経路や危険箇所を知り、タクシー利用者が災害時の注意点を知らせたい。震災の記憶を伝承する「語り部タクシー」の活動では、東部道路の避難階段も案内コースに入れていく。むすび塾で聞いた住民の声も利用客に伝えたい(仙台中央タクシー運転手・菊地正男さん(66))

選択肢の一つ 周知徹底

東北大災害科学国際研究所教授 邑本 俊亮さん

車避難を考えている地元の人から「東部道路は必ずしも優先度が高い避難場所ではない」との声が多くなってきた。善しあしは別として、その気持ちは分かる。ただ、「一切終わった時は東部道路」という知識が浸透しているのも事実で、これは意識付けと同等に大事なことだ。知識がないと選択肢がなくなる。東部道路を訓練で体感させておかないと、いざという時に動けなくなるのが人間だ。大切な知識を広く伝えるついでに、いかに訓練の機会を増やしていくかが今後の課題と考える。

犠牲回避の体験共有を

東北大災害科学国際研究所長 今村 文彦さん

車避難は危険が大きいことを改めて強調したい。車は「便利」な車を手放したら被災後の暮らしが大変だ、といった声はよく聞かれるが、渋滞に巻き込まれて多くの犠牲が出た震災の教訓を忘れてはならない。本場にみんなが車で逃げたらどうなるか。計画だけではなく、実際に訓練で確かめることを勧めたい。その上で、複数の避難場所を想定しておいたほうがいい。あつちがだめならこち、こちもだめなら第三の、となるように準備することが大切だ。

仙台平野の沿岸部や東部道路は貴重な高台。避難の選択肢として意識したい。似た状況は北海道や高知など国内にも多くあり、東部道路で多くの人が助かった事例を共有する必要がある。